

## 植生の遷移・新しい教会

主任司祭 小池亮太

四月下旬から長野と岐阜の県境付近を震源とする地震が続いていました。そして、七月八日未明、地震に加えて大雨の影響により、震源に近い上高地への入口の釜トンネル付近で大規模な土砂崩れが起きました。斜面が崩落すると、土砂と共に森が滑り落ち、茶色い山肌がむき出しになります。そのような場所でも、条件が良い場合、十年後には植物が地表を覆い、二十五年ほどで森が回復するようです。このような「植物の種類が時間の経過とともに移り変わり、裸地から森が形成される過程」を「植生の遷移」と言います。

土の少ない厳しい環境にも耐えられる「一年草」の種子が、風や鳥のフンによって運ばれてくることで「植生の遷移」は始まります。何年かすると「多年草」と呼ばれる植物が生えてきて、土壌が少しずつ作られてきます。すると、日当たりのよい環境でよく育つ低木の「陽樹」が森を作り始め、やがて、高木の「陽樹」が増えてきて森の姿は変わっていきます。太陽の光が地面に届かなくなって

「陽樹」の幼木が育たなくなる、そこに「陰樹」と呼ばれる、日陰でもよく育つ木の種が侵入してきます。こうして、森は「陽樹」と「陰樹」の混ざったものへと変化していき、高木の「陰樹」が増えると「陽樹」は次第に姿を消し、「陰樹」の森となります。そうになると、新しく芽生えて成長するのも「陰樹」であるため、大きな変化が見られなくなり、こうして「植生の遷移」は終わります。

「コロナ前」「コロナ後」と言われるように、新型コロナウイルス感染症の世界的大流行を境に、私たちの日常は別のものになってしまいました。今まで考えるまでもなく「当然なもの」

「普通のこと」として、そこにあった私たちの教会共同体とミサも、地震と大雨で起きた土砂崩れのように、新型コロナウイルスによって崩され、押し流されてしまいました。そして、私たちは「この事態が終わり、早く元どおりになって欲しい」と願いながらも、土砂と共に滑り落ちた森が二度と元に戻らないように、「この感染症が収束しても、もう今までの教会には戻れない」と心のどこか気が付いています。けれど、さ

まざまな困難に遭っても、ミサを祝い、互いに愛し合い、神と共に奉仕する教会共同体は今日まで続いてきたのです。

茶色い土がむき出しになった山のように、目に見えないウイルスによって今までの教会共同体は崩れてしまいました。この出来事には様々な痛みを伴いましたが、安定して大きな変化が無くなった森のようだった教会は、土砂崩れの後に起きる「植生の遷移」のように、少しずつ姿を変えながら、新しく生まれ変わるのでしよう。

今までのものが崩された教会に、「一年草」のような新しいものが現れるでしょう。それが長くは続かなくても、何回かそのようなことが繰り返されると、継続する「多年草」のようなものが根付き、それが「低木」を育む土壌を作り出します。それが「陽樹」の森のような共同体を育て、やがて「陰樹」が形成する深く荘厳な森のような教会へと変わっていくのだらう。爽やかに晴れた秋らしい日がほとんど無いまま、一気に寒くなり、山々を覆う森が紅葉で美しく染まったというニュースを聴きながら、このようなことを考えていたのです。